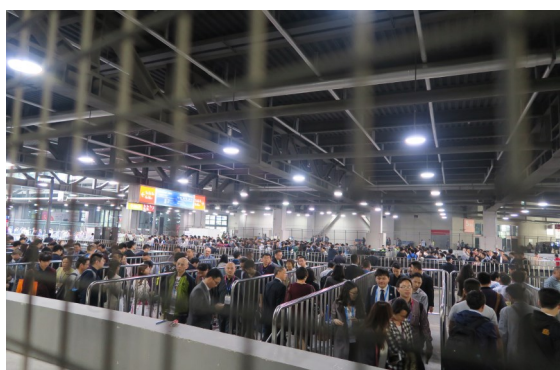




上海CMEF機器展示会訪問記

検査部長 康 東天

昨年中国上海で開催されたChina International Medical Equipment Fair (CMEF、2016年4月17～20日)に1泊2日で参加しました。4日間で延べ10万人の参加者が見込まれているという、世界でも最大規模の体外診断機器試薬を中心とした医療機器展示会です。遅れに遅ればせながらの訪問記です。現在、日本臨床検査自動化学会理事長を務めていることもあって、世界の機器展示会の現状を知るために、アジアに在ってその存在感を世界に高めているCMEFを訪問してみました。



駅入り口の行列

CMEFの展示会場の「国家会展中心(上海)」は横浜パシフィコ8つ分ほどの規模を持つ巨大なコンベンション建造物でした。私が訪れたのは昼食を食べた後の午後1時を過ぎた時刻でしたが、驚いたのは、会場出口そばにある地下鉄駅の入口付近でした。まだ午後1時ですがすでに帰る人であふれていました。駅入口に人が殺到すると危険と言うことで長い長い蛇腹状の通路が設けられて、駅入口に誘導されていました。一番手前を歩いている人が駅入口に到着するのに一体何分かかることやら、。。。

展示は7～8割が中国企業、残りが日本や欧米の企業でした。体外診断用機器試薬の開発は日本や欧米が相当に先に進んでいると思い込んでいたので、中国企業がこの広大な会場の大部分を占め、個々に見ても、外国企業以上に大きなブースを構えている企業が多数あり、中国の診断機器開発が質的にも量的にも非常に向上拡大しているのを目の当たりにした思いでした(写真:とある中国企業ブース)。会場内も人があふれていました。入場者のほとんどは中国国内の企業関係者で、昨今の中国政府の公務員への接待に対する厳しい政治方針の影響で、医療関係者の参加は今年は少ないとの話でした。CMEFは学会を併催していないので、やはりアカデミアや医療機関にいる臨床検査関係者は出張が難しいようです。

今回の訪問で最も心に残ったことは、あふれるバイタリティーあるいは熱気をCMEFに感じたことでした。圧倒的な参加者数ゆえのことかもしれません。我々自身が知らず知らずにも高揚してしまうほど大勢が集まる大会があつてこそ、日本の臨床検査の高揚もあるのだろうと考えさせられた上海での1日でした。



とある中国企業ブース

《今号の紙面》

上海CMEF機器展示会訪問記 ……p.1

明日の臨床検査を拓きマス!～検査部・研究室 マス部屋(質量分析部屋)だより～ ……p.2

鉄分検査室 第44回《甦れ熊本!》 ……p.3-8

山行知(さんこうち) 第1回 難所ヶ滝(河原谷の大つらら)・宝満山 ……p.9-11

検査部からのお知らせ、編集後記 ……p.12

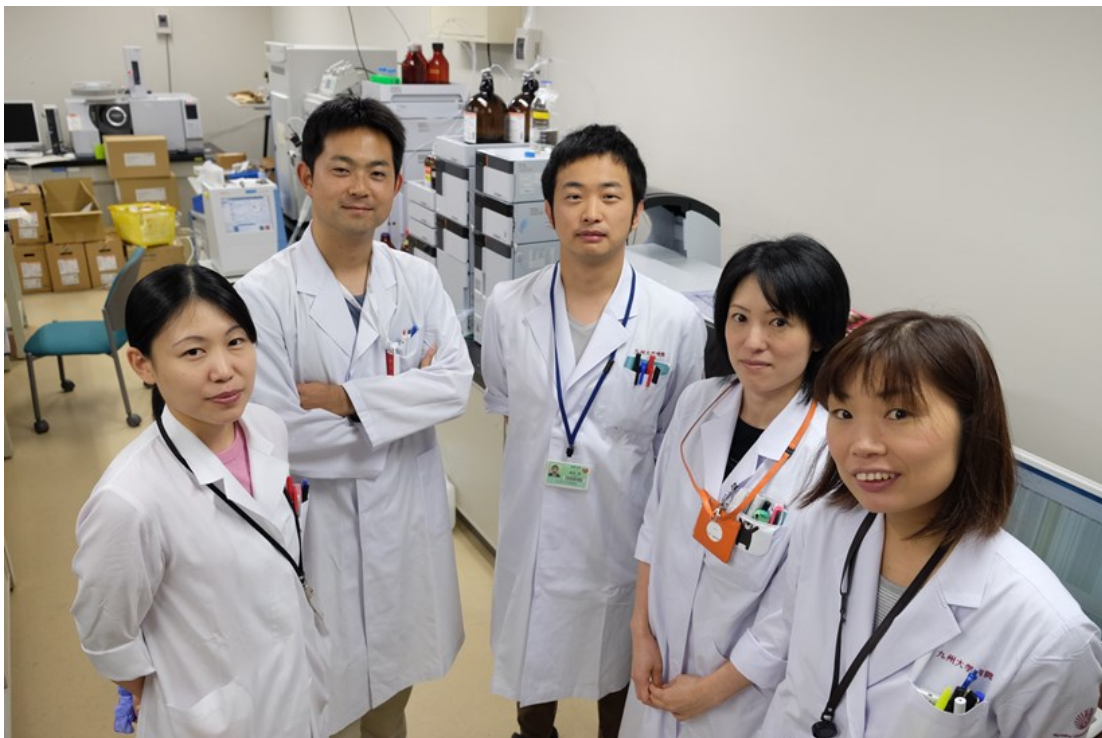
明日の臨床検査を拓きマス!

～検査部・研究室 マス部屋(質量分析部屋)だより～

九州大学病院検査部・助教・瀬戸山大樹

九大病院の検査部は、日々の検査業務を担う「検査部」と、大学院講座を兼ねた「研究室」(臨床検査医学分野)から成ります。この研究室は、検査技師が高度な専門性を身につける基礎研究の場であるとともに、大学院学生の教育機関としての役割も果たしています。

研究室の中に、通称「マス部屋」という、質量分析装置(英語でマススペクトロメトリーと呼ぶ)が所狭しと設置されている部屋があります。質量分析装置とは、文字通り、物質の重さを測定する機器のことです。質量分析は、ヒトの血液、尿、細胞や臓器にそれぞれ含まれる生体分子(アミノ酸やタンパク質、脂質など)を測定することができます。しかし、数多くの分子を抽出するためには、それぞれの試料に適した抽出法や分離法(いわゆる「前処理」と呼ばれる工程)が必要です。また、何を測定するかによって、分析装置側のメソッドを変えたり組み合わせる工夫も必要です。このため、マス部屋では院内の様々な診療科と協働し、それぞれの要望に適切に応えられるような体制づくりを進めています。近い将来には、臨床検査にも耐えうる技術となるよう、チーム一丸となって取り組んでいます(写真)。

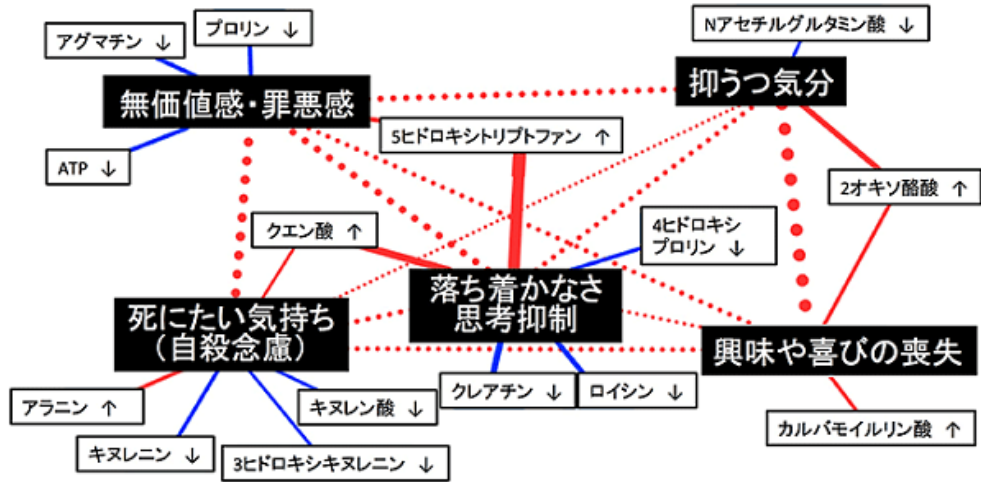


マス部屋で一緒に研究を進める検査部統合分子チームと
(著者は左から2番目)

ところで、この質量分析のどこが優れているのでしょうか？実は、質量分析の強みは一度の測定(だいたい5-15分くらい)で200-300成分を同時に計測できる点にあります。このため、例えば、わずか血液一滴を質量分析にかけることで、数百もの成分情報を元に現在の健康状態やストレスの度合いなどを評価することも可能なのです。また、疾患に特有の成分(バイオマーカーといいます)を血中から見つけることも得意なのです。

マス部屋発の研究成果！

うつ病の重症度、および「死にたい気持ち(自殺念慮)」に関連する血中代謝物を同定
 -うつ病の客観的診断法開発への応用に期待-



うつ病の各症状に関連する血中成分(太い線ほど相関が高い: 赤字は正相関、青字は負相関) 九大プレスリリース 一部改変

昨年末、マス部屋の研究成果を学術論文に発表しました(米国オンライン科学誌プロスワン)。主に、九大の精神科を中心とした共同グループで行った研究成果です。マス部屋の質量分析装置を使って、うつ病患者から採血した血しょうを測定し、うつ病の重症度や、「自殺したい気持ち」など症状ごとに関係する血中成分を突き止めました(上図)。この発見により、今後、より客観的な診断方法の開発や早期治療につながる事が期待できます。

この研究成果を公表したところ、NHKを始めとする報道各社から多くの問い合わせがあり、社会的反響の大きさに驚きました。血中成分という、より客観的なデータから体の健康状態や気分などを予測する方法は、これから益々重要になっていくと思います。私たちは、病院検査部のいち部門として、質量分析技術の精度をより高めることで、この分野の発展に貢献したいと考えています。差し当たり、人工知能技術(AI)を取り入れて、データからより予測能力の高いアルゴリズムを開発したいですね。



NHKの取材撮影を受ける様子
 康検査部長(白衣左)と著者(白衣右)



豊臣秀吉の命を受けた数え27歳の青年武将が大坂を発ち瀬戸内海を渡って豊後鶴崎に上陸した。そこから阿蘇を抜け天正十六年六月二十七日(1588年8月19日)に隈本城に入った。

その前年の天正十五年(1587)五月島津氏の降服で九州を平定した豊臣秀吉は、「九州国分け」として肥後国を佐々成政に安堵した。が、肥後国衆一揆が起こり佐々成政はその責めを負い改易となり、肥後北半国を与えられての青年武将の肥後入りであった。

隈本城を取り込む形で茶臼山の上に新城を築き、城完成後の慶長十二年(1607)隈本を熊本に改名した。

缶コーヒのTVコマーシャルでは、宇宙人ジョーンズとタモリとくまモンが天井裏から城普請案を検討しているところを覗き見る場面がある。この改名がなければ、くまモンは存在しなかったに違いない。

この入国の経路が肥後街道として江戸期整備された。

熊本城内の札の辻に四街道の里程元標が置かれた。北へ豊前街道、南へ薩摩街道、東へ豊後街道と日向街道が延びていた。青年武将の肥後入国の経路が豊後街道として整備され、大津、内牧、久住、野津原、鶴崎に宿場が設けられた。熊本藩の参勤交代の際江戸との往還にこの豊後街道が利用された。



加藤神社から天守閣

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

昨年平成28年(2016)4月14日は、年度始めの人事異動の時期に重なり、歓迎会に出席していた。その会場で突如として一斉に緊急地震速報の警報音が各自のスマホから鳴り出した。一瞬会話が途切れ顔を見合わせあった。どこが震源かと気になった。九州地域で地震が起こるとすると日南沖や雲仙、阿蘇関連のことが多い。すぐに熊本が震源と情報が入ってきた。どれくらいの揺れになるのかと身構えているとしばらくすると揺れ始めた。相当な揺れで震源地ではどれほどの揺れになっているのだろうと思った。はたして、益城町では震度7の震度であった。

この地震で終わりではなかった。2日後の4月16日未明本震が襲ってきた。北部九州でも激しく揺れ、福岡市では震度5弱を記録し、有感地震が北部九州でも何度もあった。

近代的な地震観測が行われ出した中では今回の「平成28年熊本地震」は特異的な地震である。一般的な地震では弱めの前震があり本震が発生し余震が続き次第に収束する経過をたどるが、今回は震源付近で震度7の地震の2連発であった。

これまでの耐震設計の基準は単発の大地震によるもので、2連発の想定はなく、今後再検討を要す。

「平成28年熊本地震」での災害医療で大きな問題となったのは、エコミークラス症候群である。前震から11月30日までの震度1以上の有感地震は4,165回発生し、心理的なストレスも相当なもので、地震発生早期は家に戻れず車での寝泊まりする被災者が多くなった。東日本大震災では津波関連の津波肺や低体温症が目立ったが、中越地震ではエコミークラス症候群が注目された。今回の地震でも当初よりこの疾患が心配されていたが4月17日に1例目の患者が出ると、直ちに医療機関・関連学会・行政が一体となった熊本地震血栓塞栓症予防プロジェクト(Kumamoto Earthquakes thrombosis and Embolism Protection project;KEEP Project)が動き出した。日本臨床衛生検査技師会も協力し、下肢静脈エコー検査や血栓が認められた場合のDダイマー検査などの検査項目のDVT検診が行われている。大災害時の組織的な初めての試みが進行中である。将来の大災害時に対処するための臨床の知が蓄積されつつある。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

平成28年熊本地震による鉄道の被害も甚大である。

4月14日の前震で九州新幹線が脱線した。熊本駅から熊本総合車両所へ80 km/hで回送中の800系新幹線6両編成の6両全てが本線上で脱線した。このため(新幹線高架橋等の損傷とあわせて)九州新幹線は全線運休となった。地震による新幹線の脱線としては3例目である。

1例目は平成16年(2004)10月23日の新潟県中越地震の時、上越新幹線浦佐・燕三条間を240 km/hで走行中の<とき325号>が脱線した。転覆は免れ人身事故は回避できた。上越新幹線は67日で全線運転再開となった。この事故を教訓に脱線防止策がなされた。

2例目は平成23年(2011)3月11日の東日本大震災の時、仙台新幹線総合車両センターから仙台駅へ向かっていた約70 km/hで走行中の回送列車のE2系10両編成が脱線した。脱線防止策がなされていて大きくレールから外れずにすんだ。東北新幹線は49日で全線運転を再開した。

九州新幹線では地震が少ない地域のため脱線防止ガードの設置は活断層にかかる区間を中心にほどこされてはいたが、脱線区間は未設置区間であった。全車両脱線は初めての事例となった。事故地点が立地的にクレーンを使えず、人力で脱線した車両を1両ずつジャッキで持ち上げレールの上に載せる作業が頻繁に続く余震の中で何度もその度に作業を中断しながら行われた。

4月16日の本震の日は土曜日で、博多駅の様子を見に行く事ができた。新幹線コンコースに行くと、山陽新幹線の列車案内はあるものの九州新幹線は全線不通で文字盤に何も表示が無く、利用者も激減していた。新幹線柵内待合室のテレビは地震を伝える番組を流し続けていた。思わず九州新幹線全線開業の日を思い出してしまった。その前日東日本大震災が発生し、新幹線柵内待合室のテレビは地震を伝える番組が終日流れ、想像を絶する新たな被害の情報が次々と伝えられ、待合室は全線開業のうきうき感など微塵もない重苦しい静寂に包まれていた。その時は九州新幹線が被災鉄道になろうとは思ってもよらなかった。



くまモン

4月20日に新水俣・鹿児島中央間が再開し、次いで4月23日に博多・熊本間が再開し、残る熊本・新水俣間が4月27日に再開となり九州新幹線は13日で全線復旧した。新幹線再開で被災地への人的支援が円滑になり、あらためて新幹線の存在感を印象付けた。ただし全線復旧したものの熊本・新八代間に一部徐行区間がまだあり、通常ダイヤに戻るのは今春のダイヤ改正の予定である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

熊本市電も4月16日から18日まで全線運休となった。19日に神水・市民病院前・健軍間を除き再開し、20日に全線復旧した。

熊本へは行く機会をなかなか作れず夏になってようやく行く事ができた。

新幹線車窓から熊本市街の民家の屋根にまだブルーシートが目立っていた。東日本大震災で復旧したゴールデンウイークの東北新幹線車窓から各都市で目にしたブルーシートの家並みとダブって見えた。熊本駅に着くと巨大なまモンが鎮座していた。

熊本市電に乗り中心街に向かうと、熊本城の崩壊した石垣が見えてきた。通町筋から天守閣を遠望しても瓦が欠けているのが見えた。厩橋から坪井川を渡河して熊本大神宮前に来ると石垣が崩れ落ちて本殿が崩壊したままであった。棒庵坂を登り加藤神社に至る。加藤神社は健在で境内から空堀越しに満身創痍の天守閣と対面した。



熊本城石垣崩壊

4月14日の前震を宮司が目撃していた。瓦が落ち、音と土煙りとその匂いに神社全体が包まれた由。地面も揺れ生きた心地がしなかったのではないかと思われる。

二の丸広場から空堀越しに石垣崩壊の様子をよく見る事ができた。報道映像でその様子を見てはいたものの現場に立って実見すると想像以上の大崩壊である事に息をのんだ。その差異は身体感覚的なものが関与しているのだろう。

石巻の震災伝承施設〈南浜つなぐ館〉では、昨年よりバーチャルリアリティ技術を用いたゴーグル型装置で震災1ヶ月後の被災地の様子を360°見渡せる展示を行っている。防災意識を高める展示にうってつけである。熊本城の被災の記録もこうした形で伝える試みを期待したい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

大分と熊本を連絡する豊肥本線は、加藤清正が肥後入りした経路を受け継ぐ肥後街道とおおよそ並走する路線である。

大分側からは大正3年(1914)4月1日に犬養轻便鉄道として大分・中判田間が開業し次第に路線を西に延伸していった。

一方熊本側からは大正3年(1914)6月21日に宮地轻便鉄道として熊本・肥後大津間が開業し、翌年11月11日肥後大津・立野間が延伸開業した。立野から阿蘇外輪山に取りついてスイッチバックで高度をかせいで、大正7年(1918)1月25日に立野・宮地間が延伸開業し、熊本からの鉄道が阿蘇カルデラ内に達した。

その後昭和3年(1928)12月2日に最後に残っていた玉来・宮地間が延伸開業し、豊肥本線が全通した。

「平成28年熊本地震」では、4月14日の前震で宮地・熊本間の運転が見合わせとなった。ところが、4月16日の本震で全線不通となってしまった。翌17日大分・豊後竹田間が運転再開し、19日に肥後大津・熊本間、28日に豊後竹田・豊後萩間、7月9日豊後萩・阿蘇間と徐々に運転再開していった。が、肥後大津・阿蘇間27.3kmは、今のところ被害が大きく復旧の目処はたっていない。

宮脇俊三は、〈最長片道切符の旅〉で第32日目に熊本側から豊肥本線に入っている。

六両つないだディーゼル急行は、唸りながら勾配を十五分ほど登り、ようやく平地になると吐息をついで赤水に停車する。阿蘇火口原の西端の駅で、ホームの標識は「海拔四六七米」になった。

小学生の地理の時間に「阿蘇では火口のなかに人が住んでいる。汽車も走っている」と教えられ、仰天したことを思い出す。

東日本の代表的な火山の富士山や浅間山などの火口を連想すると確かに仰天する話である。同じような感想を深田久弥が『日本百名山』の阿蘇の項で述べている。

阿蘇の規模は世界一と言われる。中学生の頃、その旧噴火口の中に町や村があり、汽車が走っていると教えられたが、想像できなかつた。後にそれが陥没火口であることを知ったが、東西四里、南北六里という広さは、やはり想像では実感できなかつた。なるほどこれは大きいとつくづく思ったのは九重山の上から、祖母山の上から、眺めた時だった。阿蘇より高いそれらの山から陥没火口を覗きこむ事ができた。その中央に立っている所謂阿蘇五岳も数えることが出来た。しかし私がさらに驚いたのは、そのカルデラよりも、環をなした外輪山の外側に広がる裾野の大きさであった。それは九重や祖母の下まで来ていた。

阿蘇を貫く豊肥本線は、稀有な路線と言える。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

豊肥本線の不通区間を見ることが出来たのは年末になってであった。

豊肥本線の不通区間である肥後大津・阿蘇間に関して肥後大津・宮地間にバス輸送が行われている。もっぱら地元の通勤・通学の便としての運行で、観光客の利便性を考慮したダイヤではなくこの利用は困難であった。

土地勘のある友人と車で阿蘇へ向かった。

熊本から阿蘇へ向かう主要道路である国道57号線は、報道で何度も報じられている阿蘇大橋を流出させた土砂崩れで途切れている。その土砂の中に国道57号に並走する豊肥本線も埋まったままである。なだらかに続く阿蘇の裾野を登って行き立野に達したところで通行止めになっていた。立野駅のホームの縁は崩れていたが、駅舎は健在であった。立野駅から南阿蘇鉄道が分岐している。阿蘇五岳の北側の阿蘇谷に豊肥本線は向かい、南側の南郷谷に南阿蘇鉄道は向かう。人気が無くがらんとしてその分岐駅の賑わいが失われたままであった。

立野から一旦国道57号線を逆走し、その北側から外輪山を横断するミルクロードで阿蘇谷へ向かった。

不通区間内には、瀬田駅、立野駅、赤水駅、市ノ川駅、内牧駅の5駅があるが、そのうち赤水駅と内牧駅の駅舎は大きな被害を受けた。共に木造平屋の駅舎で、赤水駅は内壁に亀裂が入り、内牧駅は駅舎が傾き安全性が確保できず(両駅舎とも)解体が決まった。訪れた時はまだ赤水駅舎は解体前で最後の姿を見る事ができた。ところが内牧駅舎は既に解体され更地となっていた。



赤水駅



内牧駅

噴煙を上げる阿蘇五岳を中心に時計回りに更に高森駅を目指した。その途中、肥後一宮である阿蘇神社を訪れた。有名な楼門の崩壊した映像が報道されていたが、まだ崩壊したままの状態であった。楼門ばかりではなく拝殿も崩壊し、訪れた時はちょうど拝殿の解体作業が行われていた。その奥の本殿は健在であった。



阿蘇神社拝殿

文献的に阿蘇山の最古の記録は、<随書倭国伝>かもしれない。

有阿蘇山其石壘故火起接天者、俗以為異因行禱祭

と記されてある。

阿蘇山火口脇に阿蘇神社奥宮の阿蘇山上神社がある。山上神社では毎年6月に「火口鎮め」の神事が行われ、御幣が火口へ投げ入れられる。

時計回りに阿蘇谷から南郷谷へ向かい阿蘇南鉄道の高森駅にたどり着いた。この駅舎は健在であった。前震で全線運休となり、本震で立野・長陽間のトンネルや橋梁の被害は甚大で復旧の見通しが立っていない。被害が少なかった中松・高森間が7月31日に運転再開となった。



中松駅



高森駅

この再開区間の駅の一つに見晴台駅がある。昨年末からペットボトル飲料のTVコマーシャルにこの駅が登場している。上白石萌歌がCharaの<やさしい気持ち>を歌い、南阿蘇鉄道車両も登場している。

帰路は南郷谷からグリーンロードで外輪山越え。冬の日没は早く外輪山の上からは阿蘇五岳と南郷谷の後方から暮色が深まる中スーパームーンの円い月が黄色みを帯びて上ってくる光景が見えた。



見晴台駅

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

東日本大震災では福島県白河市は震度6強に見舞われた。

国の特別史跡に指定されている白河市の白河小峰城の全長約2kmの石垣の10ヶ所で崩壊し、4ヶ所で膨らみが出た。1,568㎡の石垣の復旧を要すものとなった。

国の特別史跡に指定されている場合、原則として個々の石垣を元の場所に造られた当時の手法で復旧する事が求められている。このため崩落した石垣に通し番号を付け、スケールを入れて全ての石垣の正面写真を撮影し、縮尺を合わせてコンピューターに画像を取り込み、崩落前の写真と照合する復元作業が行われている。現場では実物大の個々の石垣表面の型抜きを組合せ確認しながら石組作業が行われている。いわば3次元ジグソーパズルである。完了するのは、平成30年(2018)の予定である。

熊本城の石垣は、53ヶ所で崩落した。石垣総表面積は、79,000㎡でそのうち修復を要すのは23,600㎡と白河小峰城の場合と一桁異なる。

おそらく熊本城の石垣の復元作業は、白河小峰城の手法に準じるものになるであろう。

加藤清正による熊本城築城に次ぐ大規模工事であり、20年前後の長丁場となりそうである。

熊本城石垣の復元を祈りたい。

山行知(さんこうち)

第1回 難所ヶ滝(河原谷の大つらら)・宝満山



大魔王YJ

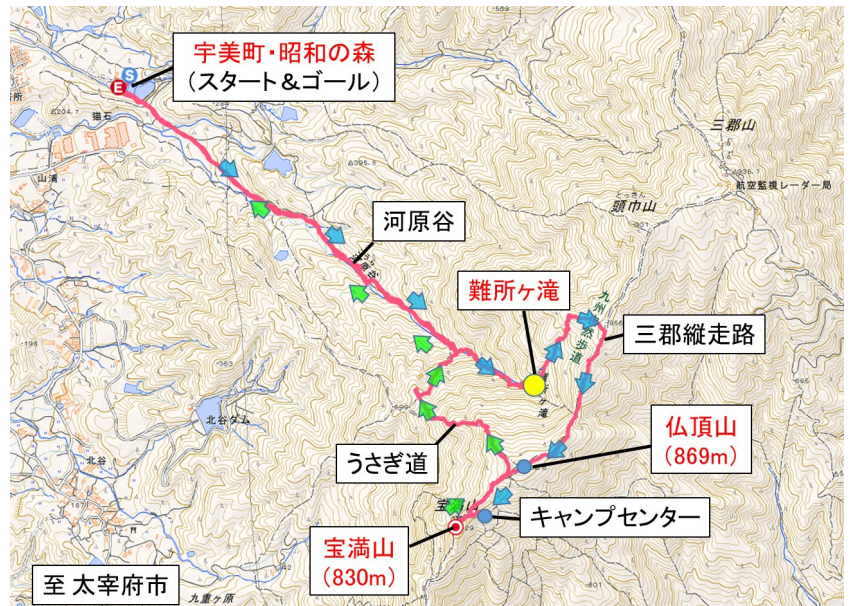
検査だよりの名物コーナー『鉄分検査室』には負けてはいられない！と、満を持して登場したのは、福岡市近郊での山歩きを趣味とする大魔王YJでございます。突然の連載開始ではありますが、山歩きの楽しさを皆さまにご紹介したく、これから『山行知』の案内役を務めて参りますので、以後お見知りおき下さい。なお、『山行知』はすでにお分かりかとは思いますが、検査部から発信する情報であることを踏まえ『参考値』に掛けております。

さて、初回の原稿の締め切りは1月末だったのですが、この時期ぜひとも見に行きたいのは、『河原谷の大つらら(通称:難所ヶ滝)』です。ここは福岡市近郊にもかかわらず、氷瀑が見れることで有名で、例年テレビ等で取り上げられますので、ご存じの方も多いと思います。昨年は沖縄にも雪が降るといって大寒波に見舞われたことが幸いし、難所ヶ滝は、それはもう、凄い！の一言につきました。果たして、昨年と同じ感動が今年も味わえるのだろうか？と行ってきました。

難所ヶ滝に行くには、いくつかのコースがありますが、最短で行けるコースということで、宇美町にある昭和の森(一本松公園)から、河原谷を経て、難所ヶ滝に向かうことにしました。

この時期はたくさんの方が大つららを見に行くため、昭和の森の駐車場は、朝早い段階ですぐにいっぱいになります。朝9時前に到着しましたが、かろうじて車数台分が空いているだけでした。

この日の天気は晴れで、あまり寒くなく、山歩きには絶好の日和ではありますが、今回の目的は大つららを見に行くことなので、できればもっと冷え込んでほしかったのが正直なところです。駐車地からしばらくは舗装路が続きますが、15分ほど歩くと本格的な山道に突入します。



そうそう、注意しなければならないのは、難所ヶ滝までは、とてもじゃないけど街中を歩くような恰好では行けません。特にこの時期は防寒対策のほか、雪道を歩くことになるため、軽アイゼンやスノースパイクなどの滑り止めが必要となります。ところが、山深くなるにつれ、積雪が多くなってくると予想していたのですが、前日の雨のせいでほとんど雪はなく、今回に限っては、滑り止め無しでも容易に最初の目的地である小つらら(大つららのおよそ200m手前)に辿り着くことができました。ここまで1時間10分でした。

次に、大つららに向かう前に、その手前数十メートルのところから、山道を脇に逸れて真の難所ヶ滝を見に行きました。一般に、大つららのできる岩壁のことを難所ヶ滝と言っているのですが、実はこの付近にはその名のとおり滝があるのです。意外と知られていないのですが、ご興味がある方はぜひ足を運んでもらえればと思います。



それから、本日のメインディッシュとなる大つららの前にやってきました！途中、滝のほうに寄り道しましたが、出発から1時間40分で到着です（駐車地から約3km）。やはり昨年のもの比べると見劣りますが、初見だった仲間たちは大興奮でした。

難所ヶ滝（河原谷の大つらら）
2017年1月28日撮影



2016年1月23日撮影



2017年1月21日撮影



ここに訪れた方は、みなさん、大つららの前で写真を撮るため、山の中なのに人で大渋滞。そして、多くの方は、大つららを見た後、そのままピストンで駐車地に戻ります。難所ヶ滝があるこちら一帯は、三郡山地と呼ばれ、稜線は三郡縦走路として知られており、せっかくここまで来たのなら、やはり稜線まで登り、稜線に出たあとは、三郡山方面に向かうか、あるいは逆方向の宝満山に行くと丸1日山歩きを楽しむことができます。

私たちは、宝満山を目指すことしました。三郡山地は標高が1,000mに満たないものの、高度が高くなるにつれ、積雪が増えていき、稜線に出る頃には辺りが冬の雪山感に包まれました。雪のある縦走路は、ザクザクと雪を踏む感触がとても気持ちよく、すごく楽しく歩けました。途中、三角点のある仏頂山のピークで休憩すると、あと少しで宝満山です（余談：宝満山には三角点はなく、仏頂山にあります）。さすがにここまで3時間半の山歩きでお腹がペコペコになりました。宝満山山頂のすぐ下には、広々としたキャンプセンターがあり、山頂を踏む前に、まずはここでランチタイム。コンロをセットしてお湯を沸かし、お湯を注いで3分間で出来上がり。山で食べるカップ麺のなんと美味しいこと！お腹が満たされたことで新たな力がふつふつとこみ上げてきました。ちなみに、ここにはバイオトイレがありますので、使用した際はぜひともご寄付をお願いします。

縦走路



雪道ザクザク



キャンプセンターでランチタイム



山頂直下の鎖場



さあ、いよいよ本日、本当の意味での山場となる宝満山の山頂に向かいます！キャンプセンターから山頂に向かう場合、その手前には鎖場(岩場)があります。濡れているときは滑りやすいので、慎重に。そして山頂に到着。ヤッター！って感がハンパない瞬間でした！

宝満山山頂(830m)にて



宝満山山頂(830m)からの展望



竈門神社上宮



山頂には竈門神社上宮があり、最初にお参り。無事にここまで来れたことを感謝します。山頂にある大きな岩の上からは360度の展望が待ち構えており、この日はちょっと空気が霞んではいたものの、福岡タワーも見えました。

山頂でくつろいだあとは下山です。私たちはうさぎ道と呼ばれるコースにて下山しました。コース上には若干雪が残っているため、滑って転ばないように歩きました。実は下山のほうが神経を使うのでとても疲れます。途中、竈門神社(太宰府方面)への分岐点があり、道を間違えないように注意しました。

ここで一つ、山歩きについて私の工夫を紹介します。山歩きで最も怖いのは道間違えによる遭難です。低山だからといって馬鹿にはしてはいけません。ということで、私は道間違え防止のために、スマートフォンの登山アプリを活用し、常に自分の現在位置を確認しながら歩いています。

そうこうしているうちに、駐車地に到着。無事に下山完了しました。この日の歩行距離は約10km、休憩込みで7時間の山歩きとなりました。そして、今日の疲れを癒すために、太宰府市の竈門神社からすぐのところにある都久志(つくし)の湯で汗を流しました。山のあとの温泉、サイコーでした！

無事下山・お疲れグリコ



(ここに掲載した写真はいずれも大魔王YJが撮影したものです)



検査部からのお知らせ



・酸性蓄尿用添加剤 酸性ユリメジャー・Tによる尿生化学検査値への影響について

外注検査項目のうち酸性蓄尿が必要とされるカテコールアミンやメタネフリン等の蓄尿において、添加剤として酸性ユリメジャー・Tをご使用いただいておりますが、検査部での検証の結果、pHの変動や添加剤中の物質による反応阻害等により他の尿生化学検査値への影響が確認されました。

影響の程度につきましては、検査項目・蓄尿量により異なる為、参考となる数値をお示しすることはできません。

酸性蓄尿時の検体は他検査には不適切な検体となりますのでご注意ください。

(酸性ユリメジャー・Tの使用方法につきましては添加剤付属の添付文書を御参照下さい)

上記内容や検体の提出方法などご不明な点がございましたら検査部受付(5771)までお問い合わせ下さい。

今後も適切な検体提出にご協力をお願い致します。

2016.12.12

検査部(内線:5771)



編集後記

日ごとに暖かさを感じられるようになりました。中国での検査機器の熱気、熊本再興にかける想い、大魔王YJさんの山にける情熱、どれも熱いものが感じられます。九大病院検査部は創立60周年を迎え先月盛大に記念式典をとりおこないました。60年の歩み、伝統、変革、いろいろな思いが巡らされた会になりました。今後10年先を見据えて伝統を重んじ、変革に挑戦する検査部であり続けたいと思う今日この頃です。

内海健